

# ことばだより



## ●目次

巻頭随筆 笑いを学ぼう.....桂かい枝.....2

## 国語

特集 子どもが本を読みたくなる学校図書館

地域と連携した読書推進活動.....吉川百合子.....3

明るく楽しい学校図書館を目ざして.....栗原浩美.....5

実践レポート 判断でしかける授業づくり.....田中里香.....8

## 書写

地域の教育力を学校に生かす.....岩波白鵬.....12

漢字コラム 増える教育用漢字.....笹原宏之.....14

# 笑いを学ぼう

桂かい枝

落語家



昨今は落語ブームなんていわれて、若い女性の姿も寄席の客席に目だつようになつてきました。

落語は、大阪弁を使う上方落語と江戸弁を使う江戸落語に分けられます。それぞれ歴史的に成り立ちがちがつていて、江戸落語は武家屋敷に招かれるお座敷芸というスタイルで発展しました。武士の前に語るわけですから、武士道の潔さ、義理人情を語つた人情噺ばなしが好まれていました。

対して上方落語は、もともとは大道芸の一種の辻噺つじばなしとして発展しました。聞く気のない行人の足を止めて、噺を聞かせ、お金を取るスタイルでしたので、必然的に「はで」で「にぎやか」で「おもしろい」ことが求められました。

大阪は、世界で最初の先物取引「米相場」が開かれたことに代表されるとおり「商売人の街」。お金のやりとりがあるということは、角が立ちやすい。そこでコミュニケーションを円滑に進めるため、大阪人はユーモアを多用しました。互いに笑い合うことで、事を荒立てない。大阪商人が多用した「しゃれ言葉」というだけじゃれの中には、興味深いものがたくさんあります。例えば、「赤子の行水」。「赤ちゃんは盥あらいの中で泣いている」から、大阪弁の「足らないで泣いている」、つまり資金不足ということ。「夏の蛤はまぐり」は、外側の貝殻は腐らないが、中の身が腐るので、「身腐つて貝腐らん」、つまり、見るだけ見て買わない冷やかしの客のことを「夏の蛤」というといたぐあいです。とんちがきいてておもしろいですね。毎年、香港ホンコンの大学で、東アジアの文化を学んでいる現地の学生に落語の講義をしています。講義の最終日にワークショップのようなかたちで、学生に数人のグループを作ってもらい、小噺を創作し披露してもらいます。香港は、国際金融都市で、いろいろな民族・文化が入り交じっている街です。多民族社会では、人と出会った際に緊張関係が生まれます。「相

手はどんな宗教？ 民族？ 習慣？」と、関係が少々ギクシャクします。その緊張を解く意味で、ユーモアを用いて、一緒に笑い合い、その後のコミュニケーションを円滑に進める。香港の学生は幼い頃から、そんな習慣になじんでいます。三十分程度の時間で、みごとな小噺を作り、披露してくれます。笑いやユーモアの感覚というと、日本の学生ではありえないほどのレベルの高さです。

日本ではやたらと国際化が叫ばれていますが、一般的な日本人の「笑いやユーモア」の能力は、世界的に見て決して高いとはいえません。日本社会では、「笑い」不真面目な印象があるためでしょう。しかし、これからは我々も、さまざまな国の人たちと渡り合っていかなければなりません。「笑いの文化」「ユーモアの感覚」を気楽に身につけることができます。落語はそんな大きなツールです。私も二十三年か国、百を超える都市で、英語落語の公演を行ってきました。

落語の魅力は、誰でも演じられることです。小噺や短い落語を覚えて、まずはやってみてください。さつちりやれば絶対に対象に受け取ります。受け取った喜びは自信につながります。感動につながります。これをお読みの先生がた、ぜひ子どもさんたちに落語を体験させてあげてください。落語を演じて、受けた経験は、人前で話したり、発表したりということに対して絶対的な自信につながります。つまり、落語を教材として学ぶだけではなく、自分自身を発信するための道具として使ってもらえたら、落語家として最高にありがたいと思います。(談)

かつら かいし 落語家、文化庁文化交流使、大阪樟蔭女子大学客員教授。「世界の私たちにも落語の楽しさを伝えたい」と一九九七年より古典落語を英訳し、英語による落語公演を始める。出版物に「桂かい枝のLet's英語落語！」(教育出版)「うしはどこでも「モ〜」」(鈴木出版)、「桂かい枝の英語落語」(全三巻、汐文社)などがある。

国語

■特集■

子どもが本を読みたくなる学校図書館

地域と連携した読書推進活動



千葉県市川市立  
富美浜小学校校長

よしかほ ゆねくら  
吉川 百合子

「あじさい読書週間」の取り組み

本校では、読書推進活動に集中して取り組み期間として、「あじさい読書週間」を設定している。活動を推進するのは学校図書館であり、推進役は常勤の学校司書と司書教諭である。一日を通して、いつも学校図書館に「人がいる体制」は、児童と本を結ぶうえで、なによりも成果をもたらすものとなっている。本年度の活動概要は次のとおりである。

○期間 六月二十日～六月三十日

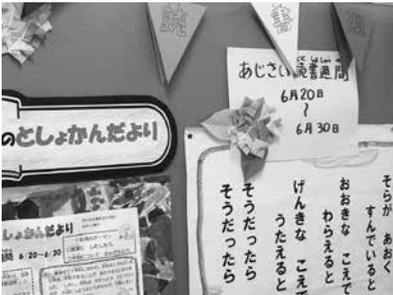
○テーマ 「言葉に親しもう」

「平和について考えよう」

○活動内容

☆「先生がたのおすすめ本紹介」

全教職員（事務室も含む）が一人一冊の本を、掲示物にて児童に向けて紹介する。



この活動を実りあるものにするために、市川市のネットワークシステムを利用して本を取り寄せて、児童に貸し出しできるようにしている。本年度は公共図書館から四十三冊、他校から百十四冊の本を集めることができた。

☆「言葉に親しむ」

詩や言葉遊びを掲載したプリントを、学校司書が作成して児童に配布することにより、言葉そのものへの関心を高め、詩集などに手を伸ばす児童を育成する。図書委員が昼の放送で詩を音読して、音声面からも活動を推進する。学校司書は、読書の時間に音読やブックトークで、言葉への関心を高めている。

☆「平和について考える」

学校司書が図書時間に、平和や戦争に関する本を紹介したり、読み聞かせを行ったりする。また、休み時間等を利用して児童が作成した折り鶴を、学校図書館に集めて市川市に届け、平和事業に協力することにより、平和への関心を高めて読書啓発を行う。

この活動においては、公共図書館から一冊、他校から七十冊の本を集めて児童に提供した。鶴を折るという活動が学校図書館に目的意識を集結させ、テーマ性豊かな読書を啓発することに成功している。



本校は九百人近い児童を抱えているため、テーマ読書をキャンペーン的に展開すると、自校の本のみでは限界があり、ネットワークによる貸し出しがとて有効である。

児童が自ら本に手を伸ばし、自ら選ぶとる瞬間は、見ていてかけがえないものに思われる。そのためには、潤沢な図書が必要である。市川市のネットワークシステムは、市内全体がさながら一つの図書館のようであり、その利便性は高い。結び合うこと、つながることの大切さを、学校と行政が認識をともにして実現した有意義な姿である。

この他、本校では日常的な児童の活動の成果として、「読書記録」を大切に行っている。読書生活を振り返り、次の読書につなぐ役割を果たしている。また、「読書郵便」の活動では、校長室にも多くの郵便が届き、児童と一对一の関わりの中で、一冊の本をめぐって会話ができることが楽しい。他には、「本となかよしビンゴカード」「辞書ひき大会」「百人一首大会」などの企画を催して、本と児童を結んでいる。活動後は必ずアンケートをとって、振り返りを大切に行っている。

### 地域による学校図書館支援

市川市は昭和三十年代より読書教育を推進してきた。五十年代には、教育委員会が中心となり、学校図書館を活用した授業研究が積み重ねられるようになった。私が教員となった頃には、既に多くの実践家と研究者がいて、大いに刺激を受けた。ご自宅に招かれた時に見た、子ども向けの良書があふれ、本の重みで床が傾いていた光景が忘れられない。市の目ざす学校図書館像は、生涯にわたって学び続ける市民の育成を願って、次のようなテーマとなって結実している。

#### 「生きる力・夢や希望を育む学校図書館」

学校図書館は、学校の中心にあつて、その教育機能を支え、高めるものであると位置づけられている。つまり、教育課程の展開に寄与するものであるといえる。具体的には「読書生活を支える」「学習を支える」「研

究を支える」図書館づくりを推進してきた。

この三つの機能を充実させるために、市は多面的に施策を展開してきたが、その中でも「ネットワークシステム」は特筆に値する。

三つのネットワーク（人・物・情報）がシステム化しているが、特に「物流ネットワーク」は、学校現場に大いに貢献している。公共図書館と学校、そして学校間で図書の共有を実現しているのである。週に二回、配送車が市内公立学校と公共図書館を一巡する。平成二十七年度の利用実績は次のとおりである。

- 物流ネットワーク全体における図書資料移動数 **28,278冊**
- ※以下は市内の学校・幼稚園（全61校・園）における実績
- 中央図書館からの貸し出し **5,713冊**
- 学校間での貸し出し **22,565冊**
- 学校図書館活用の総単元数 **5,815単元**
- 学校図書館活用の総時間数 **40,152時間**
- 学校図書館から学級文庫への貸し出し **5,320冊**

市川市教育センター（学校図書館支援センター）提供

これまで市川市は、文部科学省の研究指定を何度も受け、研究の成果を積み重ねる中で、子どもと本を結ぶ実践を深めてきている。全教職員がイントラネットでつながり、互いの実践を共有できる環境があつて、スキルアップに貢献してきた。そればかりでなく、職員研修も盛んであり、職種ごとの研修はもとより、司書教諭と学校司書の合同研修も定期的の実施されている。

今後の課題としては、アクティブ・ラーニング等の現代的課題に正対し、学びの質を高めることに積極的に関わる学校図書館像を、教職員の資質向上の意識の中に位置づけていくことだと考える。世代交代が進む現場で、若手教職員の図書館活用スキルを高めていくことが大切だ。

## 明るく楽しい学校図書館を目ざして



筑波大学附属小学校  
学校司書

栗原 浩美

子どもたちの読書生活を豊かなものにするためには、まずは子どもたちが本にふれ合う機会を増やさなければなりません。そのためには、子どもたちに、率先して「学校図書館に行きたい」と思わせる環境づくりが必要である。本校では、その一環として、ここ数年にわたり、子どもたちと一緒に、図書館改装をはじめとしたさまざまな取り組みを行ってきた。その結果、子どもたちの図書館利用の仕方や読書の傾向に変化が現れた。今回は、限られた紙面ではあるが、その取り組みについて紹介したい。

### 図書館の改装

本校の学校図書館の書架は、以前は五段の棚からなる高さ一八〇センチメートルのもので、上段の棚には子どもたちの手が届かず、そこに並べられた本は、ほとんど利用されていなかった。また、狭い空間に書架が並列に並べられていたため、すれちがうのもやっとないうほど書架と書架の間が狭く、本を探すのも一苦労だった。このような状態であったため、子どもたちは書架から求める本を探すことができず、別置してある文庫本や学習漫画などを読むようになっていた。

これを改善するため行ったのが、書架のレイアウト変更である。まず、書架を低くすることにした。書架のうち木製のものについては、上下に分解可能であったため、これを二つに分けることで、既存のものを使いつつ書架を低くすることができた。次に、書架の配置を変更した。これ

まで一箇所にまとめて並べられていた書架を、部屋の各所に分散して配置しつつ、部屋の中央を向くように配置し直した。

その結果、窓からの光が部屋全体に行きわたるようになるとともに、部屋の中央からほとんどの書架に目が行き届くようになり、格段に本が探しやすくなった。そのため、今まで借りられずに埋もれていた本も借りられるようになった。また、書架の前での会話もはずむようになり、友達どうしで本を紹介し合ったり、高学年の子どもが低学年の子どもに本を薦めたりする姿も見られるようになった。



書架のレイアウトを変更するにあたり、新たに専用の読み聞かせスペースを設けた。畳を敷き、一学級全員が靴を脱いで座れるようにした。

子どもたちに本を手渡していく方法はさまざまあるが、読み聞かせは低学年から高学年まで日常的に行っていくべきものだ。本を読むのが好きではない子どもでも、読み聞かせをすると、たちまち本の世界に入り込んでしまう。読み聞かせをする本は、長く読み継がれてきた本を中心に、季節や年中行事、学習内容と関連させながら選ぶことにしている。例えば、九月には十五夜にあわせ、月の出てくる話や科学読み物を読み、お月見の風習や秋の七草などを紹介している。子どもたちは、読んでもらった本を、家の人と一緒に楽しみたい、自分自身で読みたいと思うもので、読み聞かせをした本は必ず借りられていく。また、読み聞かせの際にその続編や関連する本を紹介することで、次の読書へとつなげるようにしている。

読み聞かせスペースは、今では休み時間になると、友達と一緒に絵本

を読んだり、思い思いのかっこうで読書をしたりと、子どもたちに大人気の場所になっている。

また、レイアウト変更する際に、易しい読み物の書架を作った。これまで低学年向きの読み物も9類の書架と一緒に並べていたが、子どもたちが本を選んで見る様子を見ると、自分に合った本を選べない子どもが見受けられた。難しすぎる本を選んだために途中で嫌になってしまい、結局は気軽に読めそうな本しか手に取らなくなるといった傾向もうかがえた。そこで、絵本の書架の並びに幼年童話を集めた書架を作り、低学年の子どものために、絵本から読み物への移行をスムーズにできるようにした。書架を設置してみると、思いのほか三年生の利用も多く、おもしろい本が見つけれられると好評だった。三年生も幼年童話を楽しんだあと、徐々に長い物語へと移行していつている。

### 児童と協力した図書館づくり

書架を低くした結果、書架の上にスペースができたことから、そこにおすすめの本を展示することとした。多数の本があっても、ただ書架に並べているだけでは、子どもたちはなかなか手に取らない。よい本を子どもたちに手渡し、読書の幅を広げるためには、さまざまなはたらきかけが必要であり、本の展示もその一つの手法である。

書架のレイアウト変更の際、大きな力となったのは子どもたちであった。本を運んだり、書架を移動したりする作業を手伝ってくれたのが図書ボランティア（委員会）である。今回、本を展示するにあたり、その展示台を作成してくれたのも子どもたちであった。ボランティア活動の時間に図書工作科の教員の指導の下、作成してくれたのである。

展示台に本を並べることで、図書館に入ってくると同時に、さまざまな本の表紙が目飛び込んでくるようになり、児童の注目を集めることとなった。展示台には、よい本だが地味でなかなか手に取られない本や、ぜひ読んでほしい本を置くようにしている。本を展示するようになって

から、それらの本も借りられるようになった。また、教員や子どもたちに、簡単な紹介文を添えて自分のおすすめの本を展示してもらおうという取り組みもしている。やはり、教員や友達の紹介する本には興味をひかれるようで、展示をきっかけとして、その本がブームになった学級もあった。展示台以外に、書架の案内表示板も子どもたちの手作りである。これは五年生が図書工作科の授業の中で作成してくれた。色画用紙を切り抜き、台紙に貼り付け、ラミネート加工したものである。分類ごとの内容が上手にデザインされ、わかりやすいものとなっており、子どもたちはこの表示板を手がかりに、目的の本を探している。

以前は市販の表示板を使っていたが、手作りのぬくもりのある表示板となり、図書館がいっそう心地よい空間となった。自分の作品が図書館で使われているということ、子どもたちにとっても、誇らしいことのように、図書館に来るたびに、自分の作品をうれしそうに見ている。



### 季節のこぼにふれる図書館

子どもと本をつなぐためには、掲示物なども大切である。これらは単なる飾りとしてではなく、そこからさまざまなものへと興味を広げ、本へいざなうものになりたいと考えている。

図書館の入り口には、こぼに出会う場所として、毎月、季節の詩や短歌・俳句を掲示している。子どもたちは、掲示物の前で立ち止まって、詩歌を口ずさんだり、暗唱したりしている。季節のこぼにふれ、そのリズムや響きを楽しむ中で、日本語の味わいに気づかせたい。

また、季節の移り変わりを肌で感じられるよう、植物などの実物を展示することも心がけている。例えば、春には、一メートル近くある大きなたけのこを飾った。子どもたちは、持ち上げてその重さに驚いたり、触って細かな毛があることを発見したり、香りを楽しんだりしていた。その後、皆で「たけのこ

ぐん！」「武鹿悦子詩集 たけのこ ぐん！」武鹿悦子著、岩崎書店の詩を読んだり、『ふしぎなたけのこ』（松野正子作、瀬川康男絵、福音館書店）の読み聞かせをしたりした。

秋には、子どもが拾ってきた松ぼっくりを牛乳瓶に入れて展示した。これは、松ぼっくりが水に濡れると閉じ、乾くと開くという性質を使ったもので、科学遊びとして本で紹介されていたものである。瓶と一緒に松ぼっくりの本を数冊展示し、「どうやって入れたのかな？ 本を読むとわかります。」と書いて並べておいた。

季節以外のテーマ展示も行っている。例えば「名探偵」や「冒険」などのようにテーマを決め、低学年向きから高学年向きの本まで複数の本を展示している。テーマは行事や最近の話題からも選ぶが、授業と連携し、学習内容に関係する本の展示も行っている。

## 本のお楽しみ袋

図書館では、読書週間などの際にイベントを行うこともある。以前行っ



たイベントで好評だったのが「本のお楽しみ袋」である。これは、本を梱包して見えなくし、その表面に中身の本に関する簡単なコメントだけを書いておくというものである。コメントだけを頼りに本を選び、中身がわからないまま借りていくことになる。公共図書館で行われていたのを目にし、おもしろい取り組みだと思い、本校でも読書週間の活動として実施してみた。

お楽しみ袋作りは、図書ボランティアの活動として行った。袋に入れる本は、自分が今まで読んだ本の中からおすすめしたいものを選ぶことにした。本が入るサイズの使い古しの封筒を用意し、それに紙を貼ってコメントを書くようにした。紙には、おおよその対象学年を書く欄と、どんな人向けの本か、そして本を紹介するコメントを書く欄を作った。なお、「どんな人向け」の欄は子どもたちのアイデアで、「友達をぎゃふんと言わせたい人向け」「探偵になりたい人向け」などユニークな言葉が書かれていた。また、袋に入れたまま貸し出しできるように、袋の外側に本のバーコードの番号をあらかじめ記入しておいた。

図書館の一角に並べたところ、たくさん子どもたちが集まってきて興味深そうに、袋を選んでいった。カウンターで貸し出しの手続きをしたら、その場で開封。中身を見て、喜んだり、読めるかどうか心配したりしながら借りていった。返却時に感想を聞いてみたところ、「自分からは借りない本だった。」「続きを読みたい。」など、普段の読書傾向とは異なる本を読む機会となったこともうかがえ、子どもたちに新たな本との出会いを提供する点で有意義だったと考える。

## おわりに

以上のように、さまざまな取り組みを行った結果、より多くの子どもたちが図書館を訪れるようになり、ますます図書館が活気づいた。子どもたちの興味も広がり、読書の幅も広がってきている。今後も新たな取り組みを実施し、子どもたちの読書活動を支援していきたい。

# 実践 レポート

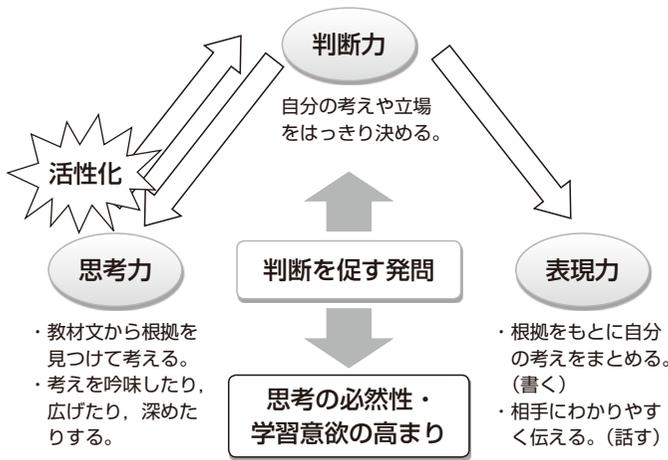
# 判断でしかける 授業づくり

—児童の思考を揺さぶる発問の工夫—



東京都調布市立  
富士見台小学校  
教諭

たなか りか  
田中 里香



## 判断でしかける授業とは

判断でしかける授業とは、判断を促す発問をきっかけとした授業のことである。この判断を促す発問は、一問一答式のそれとは違う。教材文全体を広く捉えて考えさせる大きな発問であり、児童の思考を揺さぶる発問である。児童は、この発問をきっかけに、自らの内に課題をもち、判断するための根拠を求めて自然と教材文に向かい、思考を始める。

## 児童の思考を揺さぶる「判断を促す発問」

自分の考えや立場がはっきりと決まり、根拠を明確にもつことで、児童は、意欲的に自分の考えを書いてまとめたり、相手に伝えようとしたりする。全員参加型の授業がここに実現する。児童の主體的な思考活動・表現活動が、意見交流の活性化につながり、自分の考えをより確かにしたり、広げたり、深めたりすることにつながっていくのである。「判断して、楽しく考え、表現する授業」となる。

本校のこれまでの校内研究で明らかになった、判断を促す発問の主な形式を紹介する。

- ・ 二者択一で、どちらか考える。
- ・ 複数の事例の中からいちばん〇〇なものを選んで考える。
- ・ 事例をランクづけして考える。
- ・ 見える色や聞こえる音を考える。
- ・ ○〇メーカーなど、数値化して考える。
- ・ 題名、段落、文章表現、資料等を適切に置きかえる、書きかえる、並べかえる、あてはめる。
- ・ 筆者の考えに納得するか／しないか、賛成か／反対か、共感できるか／できないかを考える。

### 判断を促す発問の設定

単元計画の中で、毎時間、判断を促す発問を設定して、授業を展開すればよいということではない。授業で児童に身につけさせたい力、指導事項、教材の特性を明らかにして、児童の発達段階や実態に合った適切な判断を促す発問でしかけることが大切である。

発問によって、児童がどのように読んで文章解釈し、自分の思いや考えをもつことができるかを想定しながら、発問づくりや単元計画を練っていきけるとよい。

### 授業の実際

**単元名** わかったことを説明しよう

**教材名** 『花を見つける手がかり』

吉原順平（四年上巻）

#### 教材の特性

○身近なもんしろちようが題材である。

○もんしろちようが、何を手がかりに花を見つけているのかを解説した、尾括型の説明的な文章である。事例を詳しく説明し、最後に筆者の主張が一般化を図るかたちで、まとめられている。

○手がかりは、花の色か、形か、それとも、においか、と読者に問いかけ、実験・観察

↓結果↓結論というすじみちをたどりながら消去法的にしほりこみ、疑問を解明していく筆者の思考過程を、読者も興味をもって読むことができる。

#### 単元の目標（身につけさせたい力）

○疑問や、実験の目的を受けて、事実と意見との関係、実験と実験との関係を考えながら読む。【C(1)イ】

○目的に応じて読み、文章を引用したり要約したりして、わかったことや考えをまとめる。【C(1)エ】

### 課題解決的な活動の設定

教材の特性と児童に身につけさせたい力から、本単元における活動として、「わかったことを説明」することを位置づけた。教材文の実験で明らかになったことを、他の事例にあてはめて考え、相手に説明するという課題解決的な活動である。説明する場合は、二段階で設定した。

一つめは、もんしろちようが、何を手がかりにして花を見つけているかを三年生に説明する活動である。教材文を読み、実験で明らかになったことをただ説明するのではなく、三年生に、もんしろちようが集まるランキングをクイズ形式で問い、正解を説明するとい

う場を設定した。相手に納得してもらえようにわかりやすく説明しようと、すすんで課題に向かう児童の姿が見られた。

二つめは、教材文にある四枚の花の写真の中で、いちばんもんしろちようが集まる花はどれかについて、家族に説明する活動である。

具体的な活動の場があることで、児童は、目的と相手意識をもって、意欲的に教材文を読み返した。また、説明の仕方を工夫し、教材文を引用したり要約したりしながら、内容を整理・再構成して、説明することができた。

### 学習計画（全7時間）

一次		二次	
1時	単元名を読み、学習の見通しをもつ。	1時	内容の全体を読み取る。
2時		2時	教材文を読み、始め・中・終わりの三部構成を考え、要約して整理する。
3時		3時	三つの実験を読み、「目的・方法・結果・結論」を要約してワークシートにまとめる。
4時		4時	筆者の説明の仕方や考えに対する自分の考えをまとめ、交流する。
5時		5時	

三次	6時	実験で明らかになったことをもとに考え、三年生に説明する。
	7時	実験で明らかになったことをもとに考え、家族に説明する。

## ■判断を促す発問の工夫

### 一次 第1時

**発問** 「この説明文で、問いの文は、どのように書かれていると考えますか。問いの文を作ってみましょう。」

教材文の全文読みをする前に、まず、題名を板書し、第一段落の一文めのみを読み聞かせた。これまでの学習で、児童は、説明文には話題提示、問いと答えがあることを知っている。そこで、この発問でしかけた。

問いの文を推論して考えることで、読みの課題を児童自身が自らもつことができた。また、教材文から問いの文を探し、自分の作った文と比較したことで、読者に興味をもたせる筆者の書きぶりについても気づくことができた。

これは、三次で児童が相手に説明する際に、相手を意識した表現に生かすことにつながった。

### 二次 第5時

**発問** 「筆者の考えに、あなたは、納得できましたか。それとも、できませんでしたか。その理由と、筆者に言いたいことを入れて、自分の考えをまとめましょう。」

児童は、納得できるか、できないかと判断を促され、まず、筆者の考えは、どこに、どのように書かれているか、教材文で確かめる読みを始めた。そして、判断するための根拠や理由を求め、黙々と教材文を再び読み、全文揭示やワークシートを振り返ったりして考え、全員が自分の考えをもつことができた。

多くの児童が、筆者の考えに納得できると判断しながらも、交流活動では、筆者にききたいことがあるとさまざまな意見が出された。例えば、具体的にどんな花で実験したのか、「あまり……のようです。」「……らしい」と推測の表現が多いが確定できなかったのか、ナンバリングで多く集まった色順に説明したほうがわかりやすいのではないか、第十四段落と第十五段落の間が一行空いているのはなぜかなどである。文章構成を再度見直し、教材文を客観的に読んで考える一時間になった。

交流後、3部構成の「おわり」にあった第15段落の「筆者の考え」は、第1～14段落の上に移動したほうがよい、となった。



### 三次 第6時

**発問①** 「紫の花・紫の造花・紫の色紙があります。もんしろちょうがたくさん集まる順にランクづけをしてみましよう。」

**発問②** 「正しいランキングを三年生が納得するように説明しましょう。」

まず、児童に、実験で明らかになったことをもとに判断する発問①をしかけたところ、児童の三分の二が全部一位とし、三分の一が一位は紫の花、二位は紫の造花、三位は紫色紙とランクづけをした。

**板書計画**

「花を見つめる手がかり」<sup>6</sup>

めあて  
実験で明らかになったことをもとに「もんしろちようが集まるランキング」を考え、説明しよう。

①「もんしろちようが集まるランキング」

( ) むらさきの花  
 ( ) むらさきの造花  
 ( ) むらさきの色紙

根きよ  
 ・もんしろちようは、色を手がかりにして花を見つけているから。  
 ・むらさきがいはんよく見える色だから。  
 ・日高先生の実験で、においや形は関係ないとわかっているから。

②三年生に説明することをまとめる  
・正しいランキング  
・その根きよ

③交流活動  
・根きよがはっきりしているか。  
・わかりやすいか。

④説明内容を見直す

⑤まとめ・ふり返り  
・相手のかくにん  
・本文の実験で明らかになったことが根きよ

この発問①は、児童の思考を大きく揺さぶった。全部一位と正しくランクづけした児童の約半分は、判断に迷い、教材文や全文掲

示を読み返して、当初の答えから訂正したあとの判断である。全体交流で、色だけが手がかりという判断の根拠を再確認した。

その後、まちがったランクづけをした三年生を相手に、もんしろちようが集まる正しいランキングについて、説明する内容を発問②で考えさせた。二人組みの交流では、説明をし合い、互いに納得の度合いを伝え、より「なるほど」と思ってもらえるように書きかえる活動につながった。

三次 第7時

**発問①**「四枚の花の写真の中で、もんしろちようがいちばん集まる花はどれでしょうか。」

**発問②**「もんしろちようが、いちばん集まる花について、家族が納得するように説明しましょう。」

前時のように、まず発問①で、教科書にある四枚の写真の中で、もんしろちようがいちばん集まる花を児童に考えさせた。次に、発問②で、家族に同様の問いかけをして、正解を説明する活動を確認し、説明の内容をまとめさせた。実験で明らかになった、花を見つめる手がかりが色であり、よく集まる色があ

ることについての説明を加えて伝えることとなった。家族との対話を楽しみながら自信をもって説明できた様子が、家族からのコメントでうかがえた。

**実践での留意点**

今回の実践では、より必然性をもたせるために、説明する相手に三年生を設定した。しかし、次年度、その三年生がこの教材文で学習することを考慮すれば、相手を、まちがったランクづけをした友達とするなど、説明する相手を検討することも必要かと考える。

**展望**

判断でしかける授業は、児童の思考力・判断力・表現力とともに伸ばす授業である。判断を促す発問づくりと合わせて、課題解決的な活動の工夫、板書の工夫、交流活動の充実という視点からも研究を重ねていきたい。

特に、交流活動においては、どの授業でも、判断したことを必ず児童に表現させ、目的を明確にして展開していきたい。交流活動が充実すれば、児童が自分の考えを整理し、考えを深めたり、広げたりできるように考えると考える。そのためにも、児童の思考を揺さぶる魅力的な発問や学習課題が重要となるだろう。

# 地域の教育力を学校に生かす

## ― 歩んだ道から ―

千葉県書道協会顧問  
岩波白鵬先生

新しい教育課程において、学校教育

に地域の教育力を生かすことの大切さがいわれています。母校で書き初めのご指導を続けておられ、千葉県書道協会顧問の岩波白鵬先生。その活動の源泉となるものや、次世代に伝えていきたい毛筆指導のあり方について伺いました。



先生の字か」と嘆かれたのではないかと思う。

### ◆質問2◆ 母校でのご指導を始められたきっかけについて

退職が近づいた頃、母校の体育館へ「躍動」という二字の額を書くことを依頼されたことがきっかけで、母校の子どもは可愛い、この子らに自分と同じ苦しみをさせてはいけなれないと思ひ、毎年母校の書き初め指導、指導というより、子どもに元気を、一生懸命にやれば誰でも上手になれるんだという思いを育てたいと思ひ願ひながら、二十数年お手伝いさせてもらっている。このことは、私にとつての母校、古里への恩返しをするものだと思つている。

### ◆質問1◆ 書の道を歩まれたきっかけについて

私が書の道を歩んだきっかけということですが、師範学校へ入つて、卒業後、教壇に立つことを考えた時、勉強の中でもっとも不得意だったのが書道でした。当時のノートを見ると、ひじきをこぼしたような大学ノート。こんな苦しみの中から、寮生活の先輩からは字を習うことをすすめられ、九成宮の臨書が発端だった。卒業後、教壇生活をスタートさせても、出席簿の氏名、日案の字、板書を見た当時の校長は、「これでも

### ◆質問3◆ 書き初め指導の極意について

書き初めは、古くから正月二日に、正月にふさわしい言葉を、吉方に向かつて座つて書き、神棚に飾る風習からきている。書にとつては歴史ある伝統文化であり、このことを指導にあたり理解させ、教科書教材として課題を書かせるならば、小五の例では、「平和な国」を書く場合、言

葉の意味をしっかりと理解させ、そのうえで、めあて、紙面への配字、筆順を丹念に指導する。限られた時数では「書いた」というくらいで終わってしまふので、冬休みの宿題として、予習することをすすめたい。金・銀の貼り紙も励みになるが、それより、指導者が一言感想を書いて作品に貼ってあげる方がより多くの子どもたちが励みになるのではないか。

#### ◆質問4◆ 現代をとりまく文字環境について

今の子どもたちは昔と違って、TV、広告などで多様な文字を見て、紙面の配字、構成等、自然に学び、昔と異なって感覚的に優れてきている。旅先で、高校生のアルバイトが書いたメニュー表を見た時、見やすい感性で、色彩を工夫し、大人より上手で驚いた。社会の環境変化が子どもの目を育てているのかと感じた。

#### ◆質問5◆ 毛筆指導をとおして、子どもたちに育みたい力や、これからの先生方に伝えたいこと

一言、誰でも練習すれば上手になる。このことをしっかりと、心に刻んでやってほしい。書写ばかりでなく、スポーツでも、他の勉強でも共通することだ。あとは教師の指導の心構えに待たせよう。教師自身が、「努力の大切さ」を生涯持ち続けること、体験することである。やってできないことはないということを、しっかりと心と体に刻んでほしい。現場の先生が毎日の板書、掲示物、子どものノートに、しっかりとした文字を書く力、書く姿勢を身につけること、その姿勢が教師たちを変え、ひいては、子どもへの指導の変化にもつながっていくのではないかと思う。

母校での書き初め指導の様子。  
体育館前面には「躍動」の額が飾られている。



ポイントとなる部分を示しながら、丁寧に指導する。

## 増える教育用漢字

## — 都道府県名の書き方 —

先ごろ、中央教育審議会の専門部会は、学習指導要領を改訂して、小学校で学ぶ漢字（現在、一〇〇六字）を増やす案を示した。新たに増やす予定の漢字は、府県名に使われる二十字で、六年前に改定された「常用漢字表」が都道府県名やそれに準ずるものまでは含めようと、従来の原則を変えて採用したことを受けたものだ。筆者は委員として、愛媛の「媛」が正式には「媛」と決められている事実を指摘したが、人名用漢字の新字体が採用されたため、愛媛県も事実上その字体に定まった。

これまで児童は、日本一多い名字である「佐藤」の「佐」を始めとして、「崎」「井」「岡」などは、周囲の名字からも自然と覚えてきた。「香」「梨」「滋」も名前などで身についた。「奈」も、小リンゴの意味と知らなくても同様だった。一方、大学生でもなかなか書けない字がある。都内では、大阪も江戸時代まで主流だった「大坂」、近くの埼玉も「埼玉」と書かれることがある。岐阜はおぼろげな記憶から、先に「阜」らしき形を書いて、二字めに「岐」と書き誤るケースが多い。新潟も「新潟」のようになる。トチギを書かせたら隣県と混同したのか「茨城」と書く者さえあった。静岡、岡山、福岡と各地でよく使う「岡」などと逆に、特定の県名にしか出てこないような字は方言漢字（小著『方言漢字』角川書店）と称しても過言ではない。栃木に帰ることを「帰栃」、辞書にない表外音を用いて「キレイ」と読むのは他県民には困難だ。

この「栃」は平安時代には「栢」と書かれた。木偏に十（と）掛ける千（ち）だから旁は「万」、つまり掛け算で作られたシャレのような国字（日本製漢字）とされる。地名学の吉田東伍、国語学の三矢重松や中田祝夫ほか、先人たちがそれぞれ検証し、明治維新後に「栢」と漢字「櫛」（レイ、木の名）とが混ざってきた字と結論づけた。ところが江戸期以前の文書や字書を見ていると「栢」の形も使われていたことに気づく。大学生や高齢者にも「栢

木」「栢木」などの誤記が少なくない。地名や姓に「栢尾」など元の字があることも混乱の一因となっている。

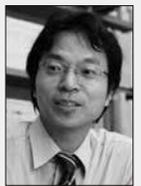
実は、小学校の社会科学教科書では、今でも四十七都道府県に加えそれらの県庁所在地まで漢字で表記されている。地元の人には、まず書き間違えな（新潟県民が「潟」を略字にしたり、鹿児島出身学生が薩（薩）摩を書けなかつたりするのはともかく、「鹿」の中央部を垂と書くといった例もあるが）。しかし、隣の県の人は結構書き間違える、さらに距離が離れていくにつれて誤答が増える。正答率に地域差が看取されるのだ。こうした方言漢字的な状況は小学校において、教科を越えた漢字教育が行われることで、今後薄れて平準化に向かうだろう。

その際に「栢」「茨」を後掲の「新たに加わる二十字」の括弧書きのように書いたら×という誤解があるといけないので、二月に文化庁が示した「常用漢字表の字体・字形に関する指針」をネット上ででもご一読願いたい。「さいたま市」の「さ」は下部をつなげて書かないと×という、地元自治体も決めている間違い（小著『日本の漢字』岩波新書）さえも随所で起きている。ことばを表すためのツールという文字の本質を見極め、デザインのレベルは問題としない指導と評価が望まれる。

## 新たに加わる二十字

茨（茨とも書く）媛 岡 潟 岐 熊 香 佐 埼 崎  
滋 鹿 縄 井 沖 栢（栢とも書く）奈 梨 阪 阜

一九六五年東京生まれ。博士（文学）。経済産業省のJIS漢字、法務省の人名用漢字、文部科学省の常用漢字、NHKの放送用語などの制定・改定に携わる。著書に『訓読みのはなし』（角川書店）、『国字の位相と展開』（三堂堂）、第三回金田一京助博士記念賞受賞、『漢字の歴史』（筑摩書房）などがある。



早稲田大学 社会科学総合学術院教授  
笹原 宏之

# 「みんなで考えよう！ 書写指導」

「書写の指導は技能に自信がない」「鉛筆の持ち方はどう指導したらよいのかわからない」といった先生のお声をよく聞きます。「すべての子どもにとってこれが正解」という指導方法はありません。それぞれの子どもに合った指導方法の「引き出し」を増やすツールとして、書写指導を考える入り口となればという趣旨で「みんなで考えよう！ 書写指導」を弊社ウェブサイトに掲載しました。硬筆・毛筆それぞれの指導方法の読み物や、授業で活用できるプリント教材など、豊富な資料をご用意しています。



スマートフォンでも閲覧できます。

## おもな内容

### 硬筆編

#### 【読み物】

「課題解決型の書写学習」をはじめよう  
文字環境の整え方 ここがポイント  
書写指導における体のみかた（見落としがち  
な左利きの持ち方の指導） など

#### 【プリント教材】

学習の流れ 掲示資料  
線のなぞり書きワークシート など

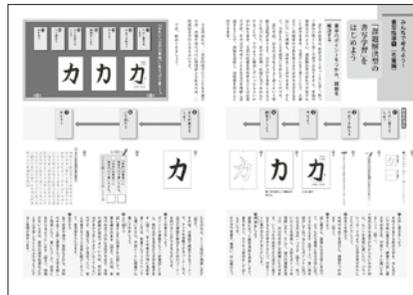
### 毛筆編

#### 【読み物】

毛筆用具の準備、毛筆用具の後片づけ  
姿勢、筆の持ち方、左利きの指導例 など

#### 【プリント教材】

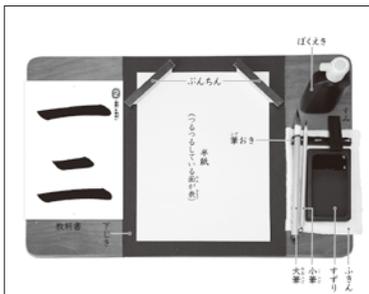
基本点画の名称 掲示資料  
毛筆用具のおき方 掲示資料  
穂先の向き 掲示資料 など



「課題解決型の書写学習」をはじめよう



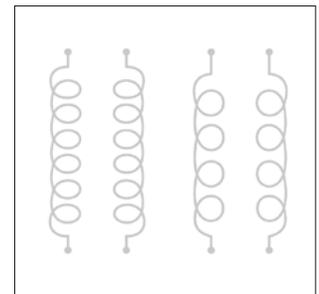
書写指導における体のみかた③



毛筆用具のおき方



毛筆用具の後片づけ



曲線の運筆練習

「教育出版」ウェブサイト <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp> にアクセスいただき、「小学校」→「書写」→「教師向け指導資料」からご覧いただけます。



右記のQRコードより、小学校書写のトップページにアクセスできます。



第14回

まもなく締め切り!!

# 地球となかよし メッセージ

## 作品募集 (2016年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、  
写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に  
参加賞が  
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2016年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境 や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交 流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会  
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞  
●協賛・後援団体は昨年実績で、確認申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね  
<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

**教育出版** 「地球となかよし」事務局 TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

前回  
入選作品



### 年の差 何才?

ぼくは、この夏、鹿児島県にある屋久島に行きました。屋久島には、まるで今にも動き出しそうな不思議な形をした屋久杉がたくさんありました。材木に適さないくらいねじれた曲がり曲がりしているものや、伐採された後の切り株や樹木の上に種が落ちて育ったもの。理由はさまざまです。その中で、ぼくは、まるで握手を求めているようなコケむした大きな樹を見つけました。「やあ、よく来たね。」「こんにちは。おじゃましています。きれいな森ですね。あ、ぼく達の年の差は何才でしょうか?」「さあ、何才かのお?」そんな会話が、聞こえてきませんか?

小学国語通信 ことばだよ (2016年秋号) 2016年8月31日 発行

編集:教育出版株式会社編集局 発行:教育出版株式会社 代表者:小林一光  
印刷:大日本印刷株式会社 発行所:教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (内容について)  
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/> 03-3238-6901 (配送について)



## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F  
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング 3F  
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F  
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラックスビル 5F  
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F  
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F  
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F  
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡E室  
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F  
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411